

学習指導改善調査 協力校 村上市立朝日みどり小学校の取組

1 研究主題

学び合うことよさに気づき、学びを深める児童の育成
～どの子も「分かった」「できた」が実感できる授業を目指して～

2 研究主題設定の理由

(1) 児童の実態

当校では、「あたたかい心づくりだす力」を教育目標として掲げている。今年度の知育の重点目標を「学び合う子」として、言語活動と体験活動の充実で一人一人の学びを保障した一人一人を伸ばす授業改善に取り組んでいる。

自分の考えをもつことができる児童が多く、基礎的な知識・技能の習得はよい。さらに、教えたことは素直に聞き、実践しようとする姿勢が見られる。しかし、学習態度に受動的な部分があり、自ら課題を解決しようとする意欲がやや低い。また、友達の考えを聞いて自分の考えを見直したり、友達と考えを交流し合いながら考えを深めたりする学習が苦手である。その原因として児童の追究意欲を喚起する手立てや友達と関わり合いながら考える機会の設定が足りなかったことが考えられる。

これらのことから、学習課題を解決しようという追究意欲をもち続け、友達と関わり合いながら学習する児童を育てることが大切であると考えた。

(2) 算数科の視点から

当校は平成 26・27 年度全国学力・学習状況調査の算数 B において、特に根拠や理由を記述する問題の正答率が低かった。授業において、児童が正しい答えを出しているかのように思考の結果だけに注目して何をもってそう考えたかやなぜそう考えたかといった思考の過程にあまり注目してこなかったことが原因にあると考える。平成 27 年度全国学力・学習状況調査の報告書にも、「数量関係」の指導改善のポイントとして、「算数の学習においては、自分の考えを振り返り、誤りの原因や正しく判断できた理由を明らかにするとともに、的確に修正することができるようにすることが大切である。」とある。

(3) 教育動向から

次期学習指導要領では、アクティブラーニングの視点から授業改善に取り組み、主体的、対話的な学びの過程を実現することが求められている。

また「障害者差別解消法」が施行されたことにより、今後、障害の有無に関わらず、すべての子どもが地域の学校に就学し、通常学級で学ぶ子どもが増えることが予想される。どの子も「分かる」「できる」を実感できるように授業のユニバーサルデザイン化が求められている。

(4) 昨年の実践

昨年度は「筋道立てて考え、学び合う児童の育成」を研究主題として、研究を進めてきた。昨年度の研究を通して、教師の指名の意図を明確にし、発表のさせ方を工夫することで児童の主体的な関わりがうまれることや、考えのポイントや児童のつぶやきを吹き出しに書くことで視覚的に授業のポイントが分かり、授業のまとめや振り返りに役立つことが分かった。

一方で、話し合わせる内容を焦点化すること、児童の実態を理解し、児童の発言を生かした授業を組織することなどが不十分であった。

そこで今年度は研究主題を「学び合うことよさに気づき、学びを深める児童の育成」として、学び合いの充実を図る。学び合うことを通して、友達の考えを取り入れながら自分の考えをよりよくしたり、

自分の考えの根拠をより確かにしたりする児童を育てたい。学び合いを充実させるには、まず追究する必然性を感じられるように、児童のもつ問題意識を焦点化して学習課題を設定する。そして、どの子どもも学び合いに参加することができるように、ペアやグループなど学習形態を工夫しながら考え方や答えを確かめ合う場面を設定する。全体で考えを交流する場面では、どの子の学びも深まるように一つ一つの考えを大切にしながら指名する順番を工夫したり児童同士の発言をつなげたりする。

3 目指す児童の姿

1時間の授業を4つの過程としてとらえ、それぞれの過程で目指す児童の姿とその姿に迫るための具体的な方策を次のように整理している。

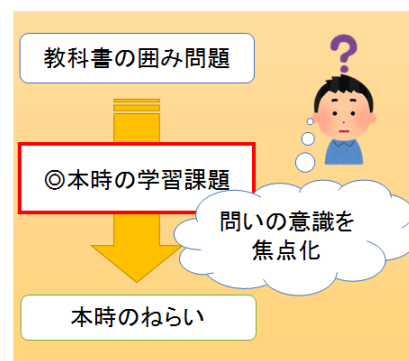
指導過程	目指す児童の姿	具体的方策
つかむ 見通す	課題をとらえ、解決への見通しをもつ子	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項と関連付けた提示の工夫 追究意欲を高める課題設定の工夫
確かめる	自分の考えの根拠を明らかにしながら表現する子	<ul style="list-style-type: none"> 説明パターンやキーワードの提示 図や式、表、グラフなどを使った算数的活動 補助教材の準備
深める	友達との考えの違いや自分の考えのよさに気付く子	<ul style="list-style-type: none"> 学習形態（全体・グループ・ペア）の工夫 児童の考えを比べやすくする工夫 児童を関わらせるための教師の働き掛けの工夫
振り返る	学習の深まりが自覚できる子	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを書く条件の提示 適用問題や発展問題の設定

4 研究内容

全職員による授業実践による研究方法を取りながら、「深める」過程の児童同士の学び合いを充実させることに重点を置く。主題に迫るために次の2点について工夫する。

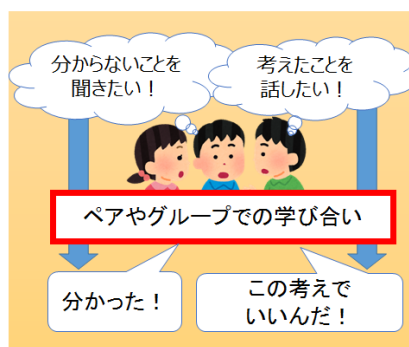
①児童の問いの意識を焦点化した学習課題の設定（「つかむ・見通す」）

学習課題は教師が与えるものではなく、教師の働き掛けによって児童から生み出されるものである。つまり、児童の問いの意識を焦点化して学習課題として設定するのである。そのために、まず教師は児童が教科書の問題に対してどのような問いの意識をもつかを予測する。そして授業が始まったら、教師は児童の発言に注意深く耳を傾け、児童の意識を把握するよう心掛け、問いの意識を焦点化していく。



②児童が主体的に学び合い学びを深めるための学習形態の工夫（「確かめる」「深める」）

児童の話したい、聞きたいという意欲が高まったところでペアやグループといった学習形態を工夫する。自分の考えがもてない児童は友達の考えを聞くことで分かるようになる、自分の考えをもつことができた児童は自分の考えを分かりやすく説明したり他の児童の考えを聞いたりして自分の考えのよさに気付く。このように友達との対話を通して新たな気付きを得ることが学びを深めることにつながる。また、学び合いの中で疑問が生じた場合には、その疑問を全体で共有する機



会を設ける。

5 実践事例（研究会での公開授業より）

4年「広さを比べよう」

(1) ねらい

広さを比べる方法を考え、単位となる大きさを基に数値化して比べると、一目で大小が比較でき、その差も明確になることに気づき、いろいろな広さを任意単位で比べることができる。

(2) 指導の実際

①児童の問いの意識を焦点化した学習課題の設定

前時、児童はグループごとに陣取りゲームを行った。それぞれの陣地を切って重ねるという方法では面倒だというつぶやきから「もっと簡単な方法はないか」という思いをもっているにとらえた。そこで本時では、クラスみんなで広さを比べるために、切って重ねなくてもできる比べ方を考えようと働き掛けた。

まず、どの陣地が広いかわかるように、比べ方を考えさせた。「ますを数える。」という発言に対して、ますの数はどの陣地も同じになり「ますの数が同じでも形が違くと広さも違うのではないか。」という思いをもち始めた。「いちばん小さいますで比べればいいのか。」という考えが出たところで、本時の学習課題を「◎どのますで比べればいいのか。」と設定した。

②児童が主体的に学び合い学びを深めるための学習形態の工夫

学びがさらに深まっていくことを期待して、児童の考えを適宜全体で取り上げた。教師の見取りで同じ考えのグループ同士を交流させたり、他のグループに説明するよう促したりした。

まず2ますで数えた子たちが「ごちゃごちゃしてわからなくなってきた。」とつぶやいたところで、全体に考えを紹介した。「6ますと残り1」のように余りがでる考え方であったが、どれが一番広いかは比べることができた。この考え方を全体で共有したところで、教師は「速く、簡単にできるのは、どのますで数えたときか。」と問い掛け、児童の意識をさらに焦点化した。次に1ますで数えた子が「どっちで比べると分かりやすいかな」とつぶやいたことを全体で共有し、「どんな形でも1ますで比べられる」という考えの子に説明をさせた。

2ますで数えたら、6ますと残り1になりました。でもごちゃごちゃしているなあ。

他のグループにも説明しに行こう。

1ますでかぞえたら、余りが出ません。

どんな形でも比べられるね。

(3) 考察

<成果>

- 「切って重ねない」という条件を設定することで、まずで自分から数える姿や線を引く姿が見られた。まずの数を同じにしたことで、「まずの数が同じでも広さが違うのではないか」とまずの大きさに注目することができた。
- 教師の見取りで他のグループと交流させることで、自分の考えを繰り返し伝える、友達の考えに納得するなど学び合いで思考する姿がたくさん見られた。はじめは1まずで数えていた子が2まずで数えた子の考えを聞くことで、自分の考えをさらに深めることができた。

<課題>

- △「小さいまず」で数えるよさに気付かせるために、「どんな形でも比べられる」ことだけでなく「1まずで数えると余りが出ない」ことに目を向けさせる必要があった。
- △児童の意識を焦点化する際に、児童がつぶやいた言葉をいかして「(1まずと2まずの) どちらで比べると分かりやすいか」とすることにより児童の意識に働き掛けることができた。



5年「比べ方を考えよう」

(1) ねらい

混み具合を比べるには、一方をそろえて他方で比べればよいことに気付き、面積・匹数が異なる場合の混み具合を比べることができる。

(2) 指導の実際

①児童の問いの意識を焦点化した学習課題の設定

はじめに「こんでいる」という言葉のイメージを共有し、「こみぐあい」について考えるために、普段の教室と本時の教室ではどちらか混んでいるか比較したり、和室とプールと体育館の3つ場面で混んでいる方はどちらか話し合ったりした。平均の考えによって均等にならずことで混み具合が比べられること、混んでいるかどうかは、人数と面積の2つの量に関係していることを確認した。

次にA, B, Cのうさぎ小屋の混み具合を比較するために絵で匹数のみ掲示した。児童が「広さが分かれば比べられる」と面積の数値が必要だという意識をもったところで、小屋の面積を伝えた。児童は面積が同じ小屋や匹数が同じ小屋であればすぐに比べられると発言した。面積も匹数も違っている場合はどうするかと問い掛けたところ、「同じにすればいい」と発言した。面積が同じ小屋や匹数を「同じにすれば」比べられることを全体で共有し、「◎同じにするには、どうすれ

ばよいか」という学習課題を設定した。

②児童が主体的に学び合い学びを深めるための学習形態の工夫

自力解決がある程度進んだ段階で、グループで学び合う場を設定した。グループで話し始めてもまだ自分の考えがもてていない児童がいることや学び合いが深まっていなかったことから、一度話し合いをやめて全体で平均の考え方を確認したり、何人かの考え方を共有したりする場面を設定した。まず匹数を面積で割った考えを取り上げ、何を同じにしたのかと問い掛けたところ「面積を同じ1㎡にした」と答えた。ここで平均の考え方がイメージできるように、小屋が点線で1㎡ごとに区切られた図を掲示して、色のついたマグネットで1㎡ごとにうさぎの数をならすことを視覚的に確認した。次に、匹数を72にした考えを取り上げて、72はどのようにして出した数かと問い掛けたところ、最小公倍数の考え方と答えた。面積と匹数が比較しやすいように表を掲示して匹数が72のときに面積はいくらになるかと問い掛けた。

面積を同じにすれば比べられそうだね。

みんなに紹介するよ。

匹数を面積で割りました。

1㎡あたりの匹数で比べるのか。

匹数を面積で割るということは、この図のように、1㎡に1匹ずつ入るとのこと。

(3) 考察

<成果>

○教科書の絵を用いて「混んでいるのはどちらか」について確認したことで、匹数や面積を同じにすれば比べられることに気付き、本時の学習課題につながった。

○面積を同じにするために、匹数を面積で割った考えを全体で取り上げ、「1㎡あたりの匹数」を導いた。このことから匹数を同じにしようと考えた子の中に「1匹あたりの面積」と書いた子もいた。この子にとっては友達の考えを聞いて考えを深める機会になった。

<課題>

△「同じにする」という言葉が出た場面で、他の子に再度説明させるとよかった。自分の考えをもつことができるように、何を「同じにする」のかを教師も子どもも共有する必要があった。

△「匹数÷面積」の考えを全体で取り上げた際に、1あたり量の式の意味を十分に話し合うことができ

なかった。点線で1㎡ごとに区切られた図と色のついたマグネットを児童に操作させるなど式の意味を理解するための手立てが必要であった。



6 今年度の成果と課題

<成果>

- 学習課題を焦点化するためには、児童が必要感をもったときに情報を提示すること、段階的に問いの意識を焦点化すること、グループでの気づきを全体で共有することが有効であった。
- 学び合う場面では、グループで話し合ったことを全体で発表するのではなく、考えをもった児童が他のグループに考えを広めるようにして他のグループとの交流を図ること、グループでの対話を一度止めて困っていることを全体で共有することが有効であった。

<課題>

- △学び合いの場面で自ら友達に尋ねなくなるような学習課題を設定することが重要。
- △学び合いの中で「どうして?」「なぜ?」と尋ねられるとよい。話す・聞くのスキルを指導することが必要。「ここが分からない」と言える児童を育てる。
- △自ら聞き、自ら話す子を目指していきたい。学び合いのイメージビデオを見せるなど、児童の学び合いに対する意識をさらに高めていきたい。また教師はグループの中でどのように学び合いが進むか、学び合う姿を具体的に想定しておくことが必要。

二年間、児童が学び合う姿を目指して授業研究を重ねてきた。今年度、徐々に児童が学び合いのイメージをもち始め、主体的に学び合いを始める姿が増えてきた。「友達に早くできるやり方を教えてもらってうれしかった」のように児童の振り返りからも学び合いのよさに気づき始めていることが感じられる。また学び合いを通して思考力や表現力、判断力が高まってきていると感じられる場面も増してきている。今年度の成果と課題をいかして、学び合いについてさらに研究を深めていきたい。

